

平和のため まず歴史認識を

メディアとの在り方も考える



対談で話す樋口健二さんと石川文洋さん＝23日、下諏訪町の諏訪湖博物館・赤彦記念館

報道写真家樋口健二「写真展「諏訪湖と私」の特別展」
23日、下諏訪町の諏訪湖博物館・赤彦記念館で行われた。原発被曝労働や環境破壊を取材し、経済成長の裏側で搾取される人々の存在を報道した樋口さん(87)と、ベトナム戦争の最前線取材し、戦地や沖縄の人々に寄り添い続ける諏訪市在住の石川文洋さん(86)。県内外の約60人が聴講し、歴史を知る大切さに理解を深め、平和とメディアの在り方を考えた。(唐沢宏)

写真展に併せ諏訪湖博物館で

初めて諏訪湖を見て「海だ!」と叫んだ昭和16年を振り返り、「諏訪湖は美しかった。僕と環境破壊の問題を結び付けていった」と語った。高度経済成長期の水質汚染からよみがえった諏訪湖に目を向けながら、「諏訪湖は国家の宝。美しいまま残してほしい」と願った。長年の原発取材を踏まえて「原発には利権があり、カネを稼ぎたい連中はいっぱいいる。何かあったらカネ。忘れないで」と語気を強めた。福島第1原発事故で溶け落ちた核燃料の取り出しが難航していることにも触れ、「東電は労働者を突っ込むのではないか。その推測が当たらなければいいが、僕の仕事は推測がいつも当たる」と懸念した。石川さんは「カメラマン

樋口健二(ひぐちけんじ) 1937年富士見町松目生まれ。高校卒業後一家で離農し東京で下宿を経営。24歳の時にロバート・キャパ展を見て写真家を志す。四日市ぜんそくなどの公害や原子力発電所で働く被曝労働者取材し、原発炉心部で働く労働者を初めて撮影した。原発事故後に再評価され、取材や講演の依頼が続く。著書に「四日市「原発崩壊」原発被曝列島「慟哭」の日本戦後史ある報道写真家の60年」など。東京都国分寺市在住。

対談 樋口さん、石川さんと 報道写真家

在(こうですよ)と「こういうことが過去にありましたよ」と伝えること」だと話した。沖縄の現状に言及し、「日米協力は本土の人は必要と言つが、沖縄の人にとつては心配。米軍基地だけでなく自衛隊も強化され、敵基地攻撃能力のあるミサイルを配備しようとしている。戦争になれば民間人が犠牲になる。それを心配している」と語った。来年はベトナム戦争終結50年。民間人の立場で戦争を取材した石川さんの写真は「ベトナムの宝」とされ、国宝として招かれる。石川さんはしばらく現地に滞在し、かつて撮影した子どもたちを訪ねるといふ。「生き残った人たちが戦後どのように生きてきたか知りたい。それがジャーナリスト

石川文洋(いしかわぶんよう) 1933年那覇市生まれ。26歳の時に毎日映画社を辞して世界一周無銭旅行に出発。65、68年までベトナムに滞在し、米軍やベトナム政府軍に同行し北と南の最前線からベトナム戦争を取材し、破や殺人、後遺症をもたらす戦争の実態を伝えた。朝日新聞社を経てフリーとなり、沖縄の軍基地問題の取材を続けている。著書に「カメラマン」私が見た戦争「沖縄の70年」など。諏訪市在住。

樋口さんは「平和のためにはまずは歴史を認識すること。人間は同じことを繰り返してきた。知ること、二度と繰り返さないこと、そして知ったことを繰り返して伝えること。途切れたらみんな忘れて、う」とし、「歴史に空っぽにならない」ことがジャーナリストの仕事だと強調した。「人間が人間を愛し、社会的弱者に優しさを示すこと」を願っていた。写真展は12月22日まで長野日報社などでつくろ委員会が主催し、樋口さんが撮影した美しい戦争の写真を中心に約70点展示されている。